

[Article]

## Speaking, Listening and Feeling (i. e. Touching and Being Touched)

— A Study of “Participation” Methods in Clinical Training —

Hirofumi Hori\*, Akifumi Sugimoto\*, Takeshi Saiki\*, Tomoko Hirayama\*

\* Aino University, Faculty of Nursing and Rehabilitation, Department of Physical Therapy

### Abstract

Clinical training is the core of physical therapy education. However, its age-old methodology could be inappropriate for today's education. We set up a study group and examined the issue. As a result, the importance of “participating with others” (i. e. interaction between instructors and students, and that between students and patients) came into focus and the necessity of exploring possible “participation” methods was indicated. We considered that one should be ready for participating with others by doing the same thing with oneself in advance.

The idea was premised on the importance of physical communication as well as that of linguistic communication, and we discussed and tried to identify our concept of “participation” with keywords such as care, criticism or commitment (engagement). Finally we reached the conclusion that both instructors and students need a learning process, where they can interpret and verbalize (i. e. think and express) their experiences of linguistic and physical communication by themselves. Clinical training may be ultimately defined as a process of understanding what “participation” means and experiencing it.

**Key words** : commitment (engagement), criticism, care

# はなすこと、きくこと、ふれること、かんじること (ふれられること)

—— 臨床実習へアンガジェする方法の検討 ——

堀 寛 史\*, 杉 本 明 文\*, 佐 伯 武 士\*, 平 山 朋 子\*

**【要 旨】** 理学療法教育において臨床実習は重要な位置づけにある。しかし、その方法論は古くから変化しておらず、現代の教育に必ずしも適当であるとはいえない。今回、その課題について、研究会を設立し検討した。その結果、「関わること」の重要性が浮かび上がり、いかにして関われるのかを明確にする必要が示唆された。研究会では人に関わる以前に自らに関わり、それを基盤に他者と関われると考えた。それは言語的コミュニケーションのみならず、身体的コミュニケーションの重要性を前提としている。

関わりについてケア、クリティシズム、アンガージュマンなどのキーワードを使用し説明を加えた。最終的に言語的・身体的コミュニケーションの経験を自らが解釈し、それを言語化できるような学習プロセスの経過（思考し表現すること）が必要であると結論づけた。臨床実習は自己、他者への関わりを理解し、経験するプロセスなのである。

キーワード：アンガージュマン・クリティシズム・ケア

## 1, はじめに

—— 臨床実習にアンガジェする ——

藍野大学医療保健学部理学療法学科内に「関わりの臨床実習研究会」という新たな臨床実習について研究する会が存在する。この研究会では系統的な臨床実習の構築のために少数のメンバーであるものの、忌憚のない意見をぶつけ合い研究を進めている。研究の主な内容は大学在学中に学生に対して行われる1年生から4年生にかけての臨床実習についての方法論である。

理学療法教育において臨床実習では実践の場を経験でき、教育できるため非常に大きなウェイトを占めている。敷衍して述べれば、国家試験と臨床実習が理学

療法教育の中で、学生にとっての乗り越えることが義務づけられた2つの壁なのである。

国家試験は4年間で学んだ知識を試される場であり、この壁を乗り越えることで初めて理学療法士の資格を得られる。その意味では明確なゴールである。4年間の知識が試される場であるために多くの知識の必要性を要求されるのだが、国家試験は一斉に行われる紙面上のテストであり、受験者にとっては基本的に平等な負荷がかかる。さらに対策を立てることも事実上可能である。

しかし、臨床実習は臨床の場が一定でない\*のと同様の意味で、求められる知識の量や学生個人にかかる負担の量に一定性がない。臨床の場で求められること

\* 藍野大学医療保健学部理学療法学科

\* 後述するが、臨床の場における対人的・社会的関係性が不確定であることをここでは簡単に述べている。

は臨機応変な対応であり、その対応には知識と技術を伴わなければならない。さらに、求められることもそのつど変化し、常に一定の正解が打ち立てられない現状である。しかし、ほとんどの場合、(大学にも臨床実習施設にも)「学生レベル」という不明瞭な閾値を有しており、それが広く流布している。このことが伝統的に受け入れられており、学生はその伝統<sup>†</sup>を受け継ぐという形で臨床実習を遂行することになる。

学生に求める評価基準については文字上で大学が提示し、一定の評価項目をもうけている。しかし、提示している内容は正直なところ大雑把で、読み手の解釈によってその意味は変化しうる。厳密にその意味を説明することは個人的な性格を含んだ内容にまで指導依頼が及ぶために困難である。さらに評価基準も時代や伝統の影響を色濃く受けており、また評価者の影響を多分に受ける。

このような困難さを確認し、不確定要素を多分に含んだことを知った上で、経験的視点でのみ臨床実習を捉えると「関係性」<sup>‡</sup>というキーワードが浮かび上がる。その理由は臨床現場と教育現場において人との関わりを抜きにして語れない現状があり、その関わりにおける問題(主に関係性の破綻)がたびたびあらわれるからである<sup>§</sup>。

ここでいう「関係性」とは、いくつかのパターンに分別される。大きく分けると大学教員と学生の関係性、臨床実習指導者と学生との関係性、対象者と学生との関係性、大学教員と臨床実習指導者の関係性となる(本論文ではこの中の大学教員と学生との関係性、対象者と学生との関係性を中心に述べている)。この関係性には評価基準が無く、印象論での言及しかできない側面(データ化が困難)を持っている。それ故に臨床実習の難しさ(学生のみならず臨床実習指導者、大学教員

にとっても)が浮き彫りになるのだと考えられる。

本研究会では、以前、臨床実習に対してジャン＝ポール・サルトル(Jean-Paul Sartre)のいう「アンガージュマン(engagement)\*\*」というキーワードから大学教員と学生の心構えについて第13回教育研究大会にて「伝統的臨床実習形態を乗り越えるために——関わることへの意志に基づいた系統的臨床実習の試み——」という表題で述べた。アンガージュマンとは社会に参加することを指し、その社会に自己を拘束するという意味を持つ<sup>‡,§</sup>。大学教員は学生のコミュニティと臨床の理学療法の場合にアンガジェしなければならない。学生は自らが所属する大学という小さなコミュニティから臨床の理学療法の場合にアンガジェする「覚悟」を持ち、そして、アンガジェしなくてはならない。これは比較的守られた場から、自ら、自らを守らなければならない場への移動を示唆する。それはより実践的場への移動であり、責任を負う場への移動ともいえよう<sup>††</sup>。

人にとって未知なる場へのアンガージュマンは不安を覚えさせ、足を竦ませる。逆に、期待を大きくして、ふくらませたイメージを先行させアンガジェする。このどちらもストレス心理学の立場からではストレスフルな状況となり得る。つまり、アンガジェすることは容易なことではないのだ。それを大学教員や臨床実習指導者がアンガジェできて「当たり前」の視点から学生を臨床に何もせずに送り出すとすれば、それは送り出す側として無責任である。可能な限りといった逃げ口上を前提にしなければならないのだが、教育がアンガジェさせるためにやらなくてはならないことを考えなければならぬ。また、それを実践しなければならない。本論文ではその方法論を考察し記述することが目的である。次節より、そこに行き着くための概念とその方法論について記載していく。

## 2. 関係を構築するための方法 —— 臨床へのアンガージュマンの前に ——

本研究会の検討において、学生が臨床の場合にアンガ

† 本研究において使用する「伝統」の意味は意図的に受け継がれた特有の何かを指すのではなく、私たちの理解に(無意識に)影響を与えている目に見えない支配である。ガダマーによると「少なくとも、われわれが常に行っている過去に対する振る舞いでは、いずれにしても、伝承されたものから距離をとったり自由にすることはない。むしろ、われわれはつねに伝承の中にいるのであって、この《なかにいる Darinstenhen》ということだけはけて、伝承を対象化し、その結果、伝承が語りかける内容を異質で疎遠なものと考えさせる行為ではない」と『真理と方法』で説明している。

‡ 今回は特に人間関係について述べている。

§ 実際的な問題として、さらには理学療法業界を取り巻く社会的環境との関係も本来的には含まれている。しかし、ここでは人間関係に突出して言及している。

\*\* 現にある状況から自己を開放し、あらたな状況のうちに自己を拘束することの意味で使用している。

†† 実際には臨床実習指導者の下、実習を行う故にその指導者の保護下ではある。しかし、対象者との関わりは行動や発言など個人に責任が発生するためにこのように述べた。

ジェする最も重要な方法は自らが自らに関わりを持ち、そこから他者を知ることにあると考えている。つまり、感じる、考える主体が自分であり、そこをスタートに他者について感じ、考えるのである。この検討の根底には方法論としていきなり学生を臨床の場に投げ出すのではないとの考えがある。外を臨む前にセラピストでも患者でもない一個人としての場を考える必要性があるのだ。一個人として自らの存在を認め、他者にふれさせること、そして、そこから自分を改めて考えること、それは他者を通して自らを確認するという一連の流れを有する。

セラピストは他者に関わりを持つことが前提とされている職業である。その意味で、視線はセラピストから他者に向けられる。しかし、同様に他者からセラピストにも視線が向けられるのである。この交差する視線に「関わり」の基本的認識があるのではないだろうか。当たり前のように思える事象であるのだが、関わることへの意志を持つためにはその認識を確かにしなくてはならない。つまり、関わりとはお互いの関心が双方向性に引き合うことであり、そこに双方向性の意志が介在する抜き差しならない緊張感のあるアクチュアルな営みなのである。

このように考えて、学生の臨床実習の方法論で特に重要なのは学生に対して臨床の場へ準備なしに参加を無理強いしないことであると考えている。大学教員が臨床の場を知っている、あるいは想定しているからといって、その想定の中に簡単に学生を組み込んではいない。つまり、臨床の場に投げ出され、それに適応できて当たり前という考えを退けるのである。確かに、伝統的にはその方法論で対応できた経緯がある。しかし、その前提を退けると同時に、対応策を提出しなくてはならない。セラピストは「関わり」を基本線として考えていかなければならない職業であるため、関わりの仕方を学生に、事前に知らせておく必要があるのだ。

本研究が提出する大学の行う対応策の理念は、臨床の場に投げ出す前に「丁寧に自己にふれさせること」である。丁寧に自己にふれさせるとは、前述したように他者の視線に自己を通し、再認識するプロセスの促しである。他者の視線を通した自分の認識（他者の意見）には、おそらく自分自身の認識と差異がある。学生自身がまずその差異を確認し、必要に応じて修正するような方法論を与えなければならない。ここで注意が必要なのは、差異を単純に認めさせることではない。差異に気づき、その差異の修正が必要であるかどうかを判断させるプロセスが欠かせないのだ。

では、何を持って修正の必要性を判断させるのか。それを明確にすることが実のところ難しい。それを探るために一つの引用から考えてみる。この引用は臨床実習に対する直接的なものではなく、現代を生き抜くことについて哲学者が回答したインタビューからである。その中であらわれる「クリティシズム」というキーワードに注目したい。

平成20年10月6日の毎日新聞夕刊の中で「蟹工船の時代に この国はどこへいこうとしているのか」という特集が組まれていた。そこで大槻英二氏にインタビューされた哲学者 鷲田清一氏は現代を生き抜くために必要なことは「人生や社会のことは正解がないことが多い。正しいことを的確に判断して行くには「価値の遠近法」をもつことです」と述べている。そして、以下のように付け加えた。

人間は自分を見るのが一番下手なんです。自分から身を引きはがして、自分の置かれている状況を見るのがつらい。学問や報道は、そうやって、自分が置かれている状況を自分をも含めて離れたところから見る。それがクリティシズム（批判）というものです<sup>4)</sup>

このコメントはクリティシズムについて非常に明快に説明した語りである。そして、先に述べた「丁寧に自己にふれさせる」という試みはこのクリティシズムに至るためのプロセスを含んでいる。本研究においては人生や社会について述べるわけではないが、価値の遠近法という視点から自らを離れたところから見るという考え方に完全にフィットする。その意味で、鷲田のコメントを引用した。

自らについてクリティカルに確認する。この試みは鷲田が「人間は自分を見るのが一番下手なんです」とコメントするからには、簡単ではないといえる。しかし、クリティカルに自らを確認する試みが現代社会に必要であると同様に、人と関わりを持つセラピストが必要であると同様に、人と関わりを持つセラピストが他者以前に自分との関わりをクリティカルな視点で持つことは重要であると本論文で指摘する。この指摘は先ほどから使用しているアンガージュマンの考え方に符合する。

アンガージュマンとは不安定な自己存在を社会に拘束する意味を有している。自己という存在の不安定さを社会に拘束することによって解消する。しかし、その反面、アンガージュする社会のルールや要請に対して責任が生じる。それをあらかじめ知った上、つまり責

任を発生する覚悟を持ってアンガジェしなくてはならない。この責任に対する覚悟の所在を明らかにする方法に必要なのがクリティシズムであると考え。つまり、批判的に自己を見つめ直す試みから必要な行動を導くのである。

社会にアンガジェすることは容易ではない。これはどんな社会に対しても同様である。しかし、自らについてあらかじめ考えておくことで社会との境界が少しづつ明確になる。さらに、今いる社会の他者のまなざしを通して、自らを確認することで外（他の社会）への可能性を見いだすのである。ただし、他者のまなざしを単に道具的に取り扱うのではない。道具的とは必要不必要を自分の都合で仕分け、あらかじめこのまなざしはこの部分で使用するという決め方であり、限定的な認識である。また、これはある特定のところにしか役に立たないという命題論的な認識である。

重要なのは関係性の中での他者のまなざしを引き受けることである。他者が〈私〉に対して思う何かをそのまなざしから、また、その言葉から一旦受け止めるのである。そして、自分が思うところと他者の思うところの違いから新たな自分の像を止揚として導き出すのである。これがクリティシズムである。そこからアンガージュマンとは他者のまなざしの意味を引き受けることであるといえる。

内容が実際的な方法論から遠ざかってしまったが、方法論以前に、論理的に関係性についてふれておく必要があった。関係とは双方向性の意志の交わりである。その意志の交わりに際して、自らを引き受けておくこと、その準備によって関係性の中にあるお互いの差異に気づくことができる。自らにふれることによって、他者との違いに気づく。他者の視線を受け入れることで自らその違いに気づく。このプロセスを臨床に出る前に踏ませておきたい。そのように考えて「丁寧に自己にふれさせること」を臨床実習のスタート地点においてみた。

### 3. 理学療法士（セラピスト）という職業 —— 双方向に入り交じる情動 ——

2節では「丁寧に自己にふれさせること」の説明を行った。これは他者と（専門家として）ふれあうために必要なプロセスであると考え。本節では、専門家としての理学療法士について考察する。専門家である理学療法士がなぜ自己を知らなくてはならないか。専門性の射程から立ち現れる命題にどのように自己理解

が関与するのか。その回答を導き出す試みから本研究で考えている系統的な臨床実習の方法論を組み立てることに挑戦する。

本節では、理学療法士（以下セラピスト）について考えてみる。考える内容はその定義<sup>30)</sup>ではなく、この職業が何をやっているのか、そしてこの職業に何を求められているのかを確認するのである。

まず、セラピストして人に接する意味について考えてみる。そのことでまず考えるべきは「ケア」の概念である。人と接する際に避けては通れない概念であり、これを見ておくことで前述の他者との関係性が明確になると考える。ただし、セラピストは治療者である側面が強いために「ケア」ではなく「キュア（セラピー）」を担う職業であると考えられる場合がある。とはいえ、キュアを担うにしろ、以下に述べる鷺田の引用からケアを顧みる必要は充分にある。

ケアという言葉は、「だれよりも彼女のことを心配（ケア・フォア）しているとか、「父母の面倒をみている（テイク・ケア）」という使われ方をする（ジョン・マクナイト「専門化されたサービスと人を不能化する援助」参照）。ここで重要なのは、他者としての誰かへの関心である。そして、結論を先取りして言えば、この他者への（ひととしての）関心が、相手の側に逆方向の「他者への関心」を呼び起こすということ、こういう反転がケアの核心にはあって、ケアといういとなみの相手を「お客様」として遇することは、管理としてのケアと同じく、この反転の可能性をこそあらかじめ殺してしまうということである<sup>6)</sup>（傍点は著者による追記）

この引用は「ホスピタリティ」を説明するために使用された文章である。患者をお客様扱いすることでできる関係性の根本的な破壊について鷺田は述べている。ケアとは誰かのための行為としての何かだけではなく、私たちが他者と相対するときの双方向性の「関心」がケアの基本なのである。さらに鷺田は「ケアという関係は、身体をつうじたコミュニケーションの一つであ

30 「理学療法」とは、身体に障害のある者に対し、主としてその基本的動作能力の回復を図るため、治療体操その他の運動を行なわせ、及び電気刺激、マッサージ、温熱その他の物理的手段を加えることをいう（理学療法士及び作業療法士法第2条）。

るからこそ、ケアされるひとのみならず、ケアするひとをも、ある感情的な関係へと巻き込んでしまう<sup>7)</sup>と述べる。実際的にまた経験的にこの双方向性の感情の巻き込みは確かに避けられないといえるのではないだろうか。心理学的に言えば転移感情、逆転移感情であるといわれるかもしれないが、巻き込まれる感情は単に好き・嫌いといった二者択一のものではない。もっと複雑な影響関係であり、情動的なふれあいを多く経験する。この情動的ふれあいは単に言語的コミュニケーションのみによって起こるものではなく、身体をつうじたコミュニケーションからも起こるのである。

セラピストはセラピストである以前に〈私〉である。しかし、〈私〉が思うこと、感じることはある程度セラピストという職業の修飾を受ける。あるいは、セラピストを育成する教育は、職業としての態度を説き、その枠組みに当てはまることを要請する。職業的修飾により〈私〉にとって本来的に一般人にとっては特殊な場である臨床を、セラピストであるという認識と積みかさねた経験によって「一般の場」と認識させられてしまうのである。この認識は必要であるのだが、時として他者との認識に差異を生じさせる原因となる。

通常、〈私〉の今いる場が私にとっての場である。先に述べたようにセラピストにとって臨床は職業的〈私〉の認識の中での一般の場である。しかし、その臨床に（文字通り床に臨む）来る他者は特別な場所に踏み入れているのである。一般の場所にいるセラピストと特殊な場所に現れた他者にはその場に対して認識が大きく違うのである。例えば、あるとき、セラピストが自分の場ではない、臨床に他者（患者）として訪れた場合、第三者的に見れば、その場に二人のセラピストがいると見えるかもしれない。また、セラピストにとって患者となったセラピストに対して、その場（臨床）にセラピストである故に慣れているのではないかという認識さえ持つ。しかし、患者となったセラピストにとってその場は一般の場ではなく、特殊な場になるのである。

〈私〉の場は私の場であるのだが、認識は与えられる環境に影響される。そして、セラピストであるという先入見（観）は時としてそれを忘れさせる。つまり、〈私〉の場の近くにいる他者は同じような場にいると誤解してしまい、その認識に他者を巻き込んでしまうのである。この誤解は私の中のセラピストの認識と〈私〉の認識の境界で生み出される。

〈私〉は症状によって、あるいは与えられる診断名によって患者になる。患者になった〈私〉のいる場は

やはり特殊な場である。患者にのしかかるその症状が強ければ、どの場においても、〈私〉は患者になり、「今いる場」が「一般の場」ではなくなってしまう。つまり、患者は患者という修飾の認識によって、その場を一般から特殊な場所に変化させてしまうのである。

このような二人が出会い、お互いの場に立ち入ることを要求する。このようにして、先に述べた複雑な影響関係をうみだし、情動的なふれあいが立ち現れるのだと考える。自らの場が可変的であり、他に影響を与え、また、自らの場にいることを要求する。そしてそれは関係性の中で複雑性を増す。そこにケアの難しさがある。

セラピストはキュア（セラピー）を主体にする職業であるが、場の違う他者と出会う故に、ケアの持つ複雑性を通らざるを得ない。そしてそこから他者との関係性の中に成り立つということ突きつけられるのである。どんなにセラピーを前面に打ち出そうとも関係が無いところにそれは成り立ち得ないのである。さらに関係性を破綻させることはセラピーを破綻させることになり得る。

さらにセラピストは関係性の保全を担う必要がある。この保全は〈私〉そのものに対してではなく、セラピストという職業に対する要求である。その要求は医療というシステムに内在されており、また、時代に内在されている。これは避けがたい要求であり、しかし、遂行するに簡単とはいえない。

では、どうするべきか。力強くそれに答えるとする「恐れずアンガジェすべし」といえよう。アンガジェの対象は他者との関係性を持つための場であり、ケアの複雑性が渦巻く場である。そこにアンガジェすることに対してはセラピストという修飾を受けるべきである。ただし、恐れずアンガジェするための方法はきちんと身につけておくべきである。この力強い宣言には方法論を与えなければならない。つまり、セラピストが他者に対してどのように考え、接するべきか、それを次節で述べる。

以上のように考察してきて、ほとんど個人の見解なのだが、臨床実習とは学生に場を与えてその場での関係を構築することに主目的がある、そのように思える。そして、大学教育の中で臨床実習に対しておこなうべきは関係を築くための訓練を系統的に示し、遂行させることにあるのだと考える。少なくともそれを除いて臨床実習を組み立てることは不可能であろう。

力強く臨床実習に対して述べてみたが、ケアの中にある関係性における「弱さ」の部分にもふれておきた

い。そして、力強く立ち向かうことと弱さに気づける強さを教育に組み込めたらと願うのである。その弱さについての鷲田の引用で本節を終えらるとする。

ケアを必要としているひとに、ほかならぬケアする側がケアされるということも、しばしば起こる。「弱い」ひとの前で、ケアする者がこれまでそれを抑え、あるいは隠すというかたちで必死にがんばってきたそのみずからの「弱さ」に、これまでとはちがって素直にむきあえるようになるということが<sup>8)</sup>

#### 4. はなすこと、きくこと、ふれること、かんじること（ふれられること）

実際の臨床実習の方法論に至るまで、かなり長い助走を必要とした。この助走の末、本節では、2節で述べた「丁寧に自己にふれさせる」ための方法論を示す。この方法論の根底には助走と比喻した部分のエッセンスが含まれている。そのいくつかキーワードを挙げてみよう。「アンガージュマン」、「クリティシズム」、「ケア」、「場」がそれである。これらを本論文では関係の構築と関係へのアンガージュマンに必要な重要なキーワードと考える。

最も重要な関係性はクリティカルに自己と関係することの中にある。自己との関係性の理想の姿は自ら、自分自身と折り合いをつけることである。折り合うとは、自分自身に対して感じる情動や感情を引き受けて対処する、クリティカルに自分を反省し、どのような形でも受け入れる、という作業である。しかし、この作業はひたすらに難しい。その難しさの理由を中岡成文氏は以下のように述べている。

ひとは生きていくうえで、幾多のつらさを経験する。そのつらさの多くは、自分の不能（できないこと）に由来する。〈できない〉ことそれ自体が辛いのではないだろう。たとえば、私はスキーが出来ないが、それを苦痛には思わない。〈社会で生きていくうえで出来ないことと困ること〉、また〈社会から出来ると期待されていること〉が出来ないとき、ひとは出来ない自分を責められている、あるいは蔑まれているなどを感じる。そして、そのような弱者である自分を受け入れられない。そのときの相手や周囲の目から自分を「隠さなければならぬ」と感じるのが辛い<sup>9)</sup>

ここで述べられる「〈社会で生きていくうえで出来ないことと困ること〉、また〈社会から出来ると期待されていること〉が出来ない」ことに由来するつらさは誰しもが経験し、ひとを自責的にさせる。そして、その自責感が故に自らを受け入れ難く思い、また、自分の弱さを隠そうとする。中岡は短い文章の中に自己との関係性構築の難しさの根本的問題を指摘している。

この引用で重要なことは自己との関係性の構築が難しいという指摘だけではない。関係性の構築の難しさをスタート地点としてどう対応すべきか、その考察に示唆を与えてくれるのである。教育の中でおこなうべきはこのことから「丁寧に自己にふれさせる」のでよいのだと。つまり、スタートは「できない自分」である。それを引き受けるためのプロセスを与えるのである。できないからこそどうすればよいのかと模索するのである。その模索とは問いを立てることであり、自己と対話することである。

「丁寧に自己にふれさせる」ためにまず何をすべきか。その問いに対して、第1に言語的コミュニケーションの中で自らを感じ、第2に身体的コミュニケーションの中で身体感覚を通して自らに接する方法を提唱する。

言語的コミュニケーションの中で自らにふれさせるためにもっとも簡単な方法は、自ら発した言葉に対して他者からフィードバックを受けることである。その想定は、学生が学生におこなう面接の練習である。面接を数多くこなすという古典的な方法論に対して新たな解釈を与えるのである。

2節で他者のまなざしについて述べた。提出する方法論にはまなざしのみならず、言葉でのフィードバックを必要とする。通常、自らが発した言葉は自身の耳からフィードバックされる。これは単に「思った」との違い、発した言葉、つまり語りとして認識される。その語りに対して他者的なフィードバックを与えるのである。

語りの表面的な部分、それは他者にとって感覚的に聞こえる部分にまずフィードバックの可能性を見る。感覚的に聞こえる声の大きさや抑揚、概して聴き取りやすさがポイントとなる。

次に、語りの内容である。ここでいう内容とは単にわかりやすいといった説明としての側面だけをとらえるのではない。語りの中に「近しさ」、あるいは「近づきやすさ（アクセシビリティ）」があったのかを重要なポイントとして捉える。これについての感覚は他者的な直観でよい。フィードバックする側がある程度

コミュニケーションの数をこなすことで、感覚的に近づきやすさを感じ、それを数多くフィードバックするのである。本来であればフィードバックする者に一定性を持たせる方が理想なのだが、近しさという不明瞭な評価ポイントを採用しているために直観的なものを収束して評価する、それを採用した。いわば、間主観的な近しさを現象から感覚的に拾い出すのである。

話の内容の次に確認すべきは発言者の内にある「意図」である。これは発言者自身も無意識に思っていることかもしれないが、その意図がありありとすることで相手を不快にさせる可能性があることを知るべきである。具体的には自分が聴きたいことだけで話を進める姿勢であり、それに伴い話の方向を誘導することである。時として必要であるがそれをフィードバックできればなお良い。

意図はコミュニケーションにおいて必ず互いに存在する。それはこのような内容を聞きたい、このように答えてほしいといった意志を内在しているからである。コミュニケーションは人と人が行う双方向的な意志の通い合いであるのだが、基本的に相手が話そうとする内容は話されてみないとわからない構造にある。しかし、このように話してほしい、このように答えてほしいという意図からコミュニケーションをコントロールすることがある。このこと事態は至極当たり前ののだが、セラピストとしての立場を考えた場合、答えを誘導する、問いかけにより相手を支配することは望ましくない。「閉じた」、「開いた」質問を効率よく使用しつつも、他者の語りを「聴く」、この姿勢は経験を必要とするが、認識させ、そうする意志を持たせるべきであろう。

次に、身体的コミュニケーションについて述べる。身体的コミュニケーションとは他者に「ふれること」を第1に考える。そして第2に「かんじること（ふれられること）」について考える。自らがふれ、そして他者からふれられるという双方向性の感覚的・身体的なコミュニケーションの方法について考えるのである。

ふれる行為はセラピストにとって職業的特性と呼べるもので、セラピストは「徒手」という言葉を好んで使用する。「理学療法士は手をメスに変えて治療をする職業だ」と説明する人もいる。これは徒手の使用がセラピストにとって重要な手段であり方法であることを示している。理学療法の業務が多様化した中においても徒手の部分は多分に残されており、基本的な技術を司っている。とはいえ、セラピストが他者にふれるときその方法は必ずしも明確に書き著されていない。

ほとんどの部分で経験にゆだねられる。「たくさんふれればうまくなる」という言説から抜け出すための方法論を提示されないでいる。本研究においてはこの部分にコミュニケーションの概念を取り入れて考えてみる。ここでいうコミュニケーションの概念とは双方向性の意志の通い合いである。つまり、「ふれる」・「かんじる」の双方からふれる行為を考えるのである。

ところで、ふれるという行為の特殊性をセラピストは考えているだろうか。つまり、「ノリ・メ・タンゲレ（私にふれるな）」（『ヨハネによる福音書』第20章<sup>10)</sup>と復活したイエスがマリアに言ったようにふれさせないという選択肢が多く含んでいるはずなのだ。人と人がふれあうのは、そこにある程度の合意があり、また緊張関係があるはずである。しかし、セラピストの促しに対し、ふれることを許可されるようになる。他者にふれるとは他者が近しき存在になった証になり得る。あるいは、単純にふれたいと思っただけでもセクシャルな問題を含む場合には基本的に「ふれてはならない」のである。医療という後ろ盾を持って行う、ふれるという行為の特殊性への反省には一旦「ふれておく」ほうが良いと考えている。

ここで再度、鷺田の引用からふれる行為にふれてみる。

そこで失われているのは、まさぐるというかたちでの対象との柔らかな接触だ。何かに触れるという経験は、からだの〈内〉を対象に向かって開き、それを対象の表面に、あるいはその奥にくぐもった触感につきあわせるということであった。押したり引いたり、ぐっと握りしめたり遠慮がちに撫でたりというふうに、場合によって力を入れたり弛めたりして可塑的に対応できないと、そこには物との衝突という事件があるだけで、触れるという経験は生まれない。表面をそっと撫で、擦って、物の肌理を感じ、熱を計り、重みを確かめ、やんわりと押し、ときに掌のなかで転がす。壊さないように、そっと。崩れなければ、もっと力をこめて、ぎゅっと<sup>11)</sup>

長い引用であるが、この鷺田の述べる「まさぐる」、「ふれる」の概念は、セラピストが他者にふれるときに感覚的に行っていることである。単に、〈私〉の手と他者の身体が衝突したという事件ではない。そこには感覚的とはいえ、特にふれる〈私〉において他者に対する配慮やその行為のフィードバックを自身に得て

いる。このような感覚的判断は機械に対しては要求できない（いずれ出来るのかもしれないが）。単に感覚の経験によって柔らかさ、堅さに対して対応しているのではなく、他者に対してこの程度でよいのかと配慮しながらふれているのである。さらに鷺田は「外物への強い関心のなかでこそ、ふれるという出来事は起こるのだ」と述べる。敷衍が許されれば、他者に対する関心があってこそ、ふれる行為が成立するのであり、それは手と物との衝突とは違った営みなのであると述べたい。

セラピストが他者にふれる行為は単なる衝突ではない。それと同様にふれられる、つまり感じる側にとっても身体に手が衝突したのとは違うのである。先の鷺田の引用をふれられることに関して逆の立場から読み込むことも可能であろう。ふれられている〈私〉がそっとふれられている、やさしく握られている、心地よく撫でられているといった感触である。この感覚はふれている側とふれられている側は必ずしも一致しないだろう。しかし、そこにある、ふれる側の配慮がふれられる側に伝わることはあるだろう。ふれられる側にとってそれが単なる衝突ではないとわかるように、関心も持ってふれられているとわかるのである。

このような、ふれる・ふれられる（かんじる）関係性が身体的なコミュニケーションであると考えられる。コミュニケーションである限りにおいて先に述べた言語のコミュニケーションと内容が一致する。それはふれ方、ふれる場所、ふれる意図の内容を考えておかなければならない。また、ふれられる側も同様にふれられ方、ふれられている場所、ふれられた意図などを感じ、フィードバックするという方法が可能である。

ふれる意味にはセラピストにとって言語でコミュニケーションすることと同様に重要なコミュニケーションの手段であることが内在している。また、ふれられる（感じる）意味はセラピストの視点から考えると快-不快の関係で追体験するための重要な経験を含んでおり、また、言語を介さずに配慮されているという感じを覚えることを含んでいる。

言語的コミュニケーションと身体的コミュニケーションについての意味とそこから導き出した教育の方法論の概念基盤について考察した。そこでは、フィードバックすることの有意義性を見たのだが、学生教育の際に大切な注意点も指摘をしておこう。

近い感じの学生は比較的多くのフィードバックが与えられる。また、強い意図を感じさせない者も同様

である。しかも、それは肯定的なフィードバックが多いと予測される。しかし、近づき難い、意図がありありとして学生に対してはフィードバックが多く与えられない可能性がある。さらに、その近づきがたさから否定的な意見を言ってもらえない可能性が高い。そこでの教員の仕事はこれを見抜き、近づき難い、意図のありありとした学生に対して教員側からのフィードバックを与える。そこが大きなポイントになるだろう。

学生は本節で提示した方法（フィードバックを受けること）で他者的な意見を学生自ら情報として一旦受け入れる。場合によっては理解しがたい内容のフィードバックやどうしても受け入れることの出来ないフィードバックもあるだろう。しかし、ここでは広い可能性を持って一旦情報として受け入れるのである。その促しを大学教員はしなければならない。

では、実際にどのように指導（促し）を行えばよいのだろうか。第1におこなうべきは、学生が受けたフィードバックを学生自身が自身の言葉で紙面上に言語化することである。このときには箇条書きで思ったことを可能な限り記述表現するほうが良い。この言語化の作業を通して耳で聴いた内容を一旦解釈して自分の言葉に書き直すのである。第2にその言語化されたものを箇条書きから短い文章に、短い文章を長めの文章に書き直す作業を行う。これによって、箇条書きされた材料同士が接続され、系統的な形を有することになる。そして、それにより自らがおこなったことに対する他者のまなざしを、他者の意見を理解することになるのだと考える。

このように考えるので、フィードバックは何もなかったかのように流してしまってはならない。面接の時間よりもフィードバックの解釈に時間をかけること、それが「丁寧に自己にふれさせる」作業である。他者を通して自己にふれる。そして、他者から得た情報と自分が感じて考えた情報を照らし合わせて止揚するのである。

本論では、言語化のプロセスを経過させることによるフィードバックの自己解釈を提示する。この解釈の際に教員が行うべきは箇条書きの材料の接続方法のみであり、ここでは他者的な意見を入れてはならない。また、無理な誘導もすべきではない。本人が文章を作り上げるそのプロセスが重要なのである。ときとして言葉にならないこともあるだろうけれども、そのプロセスさえも大切にしたい。

学生が「関係」の構築を行うために足掻くことも必要であろう。つまり、そのきっかけを教育の中で行い、

そして、臨床実習に出る際には関係の構築に伴う複雑な情動の問題やアンガジェすることの困難さを理解する。そして、そのアンガジェとは状況をあらかじめ理解している上で立ち向かうことである。また、自己の状況を把握しつつ言語化する能力を身につけさせておく。その上で、学生には立ち向かう勇気を持ってもらえたらと思うのだ。これが私たちの考える臨床実習へのアンガージュマンである。

## 5, お わ り に

理学療法教育にとって臨床実習は重要な山場である。しかし、その方法論は確立しているとは言いがたい。本論文においては確立されていない方法論に対して意味がないと考えるのではなく、これまで伝統的に行われて教育に対して新たな解釈で意味を与えたのだと考えている。

注目点として考えるのは、セラピスト以前に〈私〉としての部分をしっかりと認識させ、他者である患者の思うことを感覚的にであれ、追体験させるということである。一方的に行うセラピーではなく、他者ありきのセラピーを理学療法学の知識が確立する前に一旦教えるのである。デリダは「私とは他者にとっての他者である」と述べた。つまり、私を知るためには他者をも知らなくてはならない、他者として感じなければ（そのように感じなければ）ならないのだ。この考えは基盤として持っていたい。

具体的な方法論に乗っ取ってデータ化し、それを研究することにも十分な意味はある。しかし、不確定な要素を多く含んだ人と人との関係について指導していくためには、まず、関係の意味を考えるべきであった。トライ・アンド・エラーの前に行うべき理念形成である。まず幹をしっかりと立てて、そこから生えてくる枝葉について考える。ときにはいらなくなると思われる枝葉を剪定する必要が出てくるだろう。しかし、幹までは

切り倒さない。そのような試みのための論述が本論文であると考えている。

理学療法教育・理学療法業界を取り巻く環境は決して静かではない。嵐の中にあると比喻してもさほどおかしさを感じない。嵐の中に学生を簡単に投げ出して良いのだろうか。嵐がおさまるのを待つのではなく、嵐の中でも自分の足で立って、前に進むことが出来るように成長させることが教育なのではないだろうか。そのように考えて成り立っているのが当学科の「関わりの臨床実習研究会」である。

学生はいつの日か理学療法の場にアンガジェする。私たちが経験的におこなったアンガージュマンを理論的に整理して、それを言語化して提供する。その意味は確かにあると思う。嵐の中で折れない幹を育てたい。大きな理想論かもしれないが、その挑戦に啓示的な意味すら感じている。

## 文 献

- 1) Gadamer HG, 饗田収ら訳. 真理と方法 2. 東京: 法政大学出版局; 2008. p. 444.
- 2) Sartre JP, 伊吹武彦他訳. 実存主義とは何か. 京都: 人文書院; 1955.
- 3) Lévy BH, 石橋晴己監訳. サルトルの世紀. 東京: 藤原書店; 2005. p. 111-9.
- 4) 大槻英二. 蟹工船の時代に. 毎日新聞 2008-10-6.
- 5) 奈良勲. 理学療法概論 第3版. 東京: 医歯薬出版; 1984. p. 49.
- 6) 鷲田清一. 思考のエシックス. 京都: ナカニシヤ出版; 2007. p. 247.
- 7) 同上, p. 250.
- 8) 同上, p. 243.
- 9) 中岡成文. 安楽のすすめ——〈生きにくさ〉をほぐす. 臨床哲学 2007; 8: 71.
- 10) フランシスコ会聖書研究所編. 聖書ヨハネによる福音書——原文校訂による口語訳. 東京: サンパウロ; 1989.
- 11) 鷲田清一. 感覚の幽い風景. 東京: 紀伊國屋書店; 2006. p. 79.